

アジアにおける平和の思想

——仏教を中心として——

一

タイ国に Walking Buddha と称する仏像がある。詳しい由来は分からないが、それ程古いものではないようである。私の手元にあるのは、高さ二七センチのブロンズ製である。仏像といえ、通例、立像・坐像・涅槃像（臥像）のいずれかであろうから、歩行中というのは珍しい。右手を後ろへ振り、左手は前に突き出して、何かを制止しているように見える。人はこれを Stop the War の姿であるという（写真）。

仏伝の中に、釈尊が戦いを抑止しようと実際に働きかけた例としては、二例程考えられる。一つは『長部第一六経、大般涅槃経』の冒頭に出る話である。マガダの国王 Ajatasattu がヴァッジー族を征服しようと釈尊に意見を求めた。この時釈尊は、ヴァ

前田 惠 學

ッジー族のすぐれた点を七か条あげて、戦さをしない方がよいと説いた。いわゆる七不退法とか七不衰法とかいわれるものである。今一つは資料的には古くはないが、これも有名な話である。『島史注』I, pp. 346f. によれば、コーサラ国 Pasena 王の子で、釈迦族出身の母をもつ Vidudabha 王は、故あって釈迦族を亡ぼさんとして三度軍を出した。釈尊はこの時、出かけて三度 Stop をかけ三度これを抑えた。しかし四度目にはついに抑えることをやめた。そのため釈迦族は亡ぼされるにいったという。釈尊晩年の悲劇といわれる。

二

平和を実現するには、まずは争いを起こさないことである。争いがあるところに怨みが生まれる。怨みをなくすれば平和となる。



タイ、歩行中の釈尊
(Stop the War)

釈尊は怨みをなくして平和を実現したいと考えた。『法句経』五には、

およそこの世において、怨みは怨みによってやむことはない。
怨みを棄てて (aveta)こそやむのである。これは永遠不変
の真理である。

と述べている。釈尊は、この怨みを棄てる修行の方法を教えた。
瞑想によって煩惱を断ずることである。

この釈尊の教えは、長く仏教の中に生きてきた。我が国においても、法然の場合、子供の時、聞討ちに遭った父の口からこの言葉を聞いたのが出家求法の動機となった。現代では、太平洋戦争のあとサンフランシスコ講和条約の際、セイロン代表として日本の立場を支持してくれた Javanatane 氏からこの言葉を聞いた。これに感謝している日本人は少なくない。

三

しかし考えてみると、この釈尊の言葉も、実は状況によって言いにくいことがある。加害者と被害者のある場合、加害者から被害者には言い出しにくいように思われる。例えば、日韓関係のよ
うな場合である。

比較思想学会は、平成七年、韓国ソウルの東国大学校において、韓国思想史学会と日韓国際学術会議を開催した。私も誘われて、日本側の一員として研究発表に参加した。時の比較思想学会小山宙丸会長は、両国の過去の歴史と将来について述べ、日本の反省すべき点を縷々述べられたように記憶している。

平成一四年、同じく韓国ソウルの東国大学校において、日本印度学仏教学会が開催せられ、私は特別講演をすることとなった。小山会長と同じような立場に立たされた。私もやはり、かつての日韓の残念な過去の歴史に触れ、日本の仏教と仏教学の中に反省すべき点のあったことを述べ、改むべきを改めて、今後の仏教研究のあるべき方向を論じた。

それについて思い出すのは、昭和四七年、私が初めて韓国を訪問した時、各地諸寺院の参観に当たり、必ず五〇〇年前、加藤清正軍によって焼失した後の現在の諸堂であることに触れ、あとで、「過去のことを忘れず、お互い仲よくしましょう」と言われた言葉である。日本人は仲直りする時、過去のこと忘れ、水に流

して仲よくしましうと言ふ。ここには民族的エートスの違いがある。中国でもやはり「過去のことは忘れずに仲よく」という立場である。『法句経』の「怨み」について考える時、まずは「他の怨み」に対して処理が先行する必要がある。そこには、謝罪とか懺悔の問題がある。日本の仏教では己れの懺悔滅罪はよく口にするが、他への謝罪については弱い。これは日本人のエートスと絡んで、戦後の日本の処理のまずさになって現われている。

四

もともとこの世は競争の世界である。あらゆる分野において競争がある。政治・経済・社会・学問・文化・スポーツから宗教にいたるまで、競争のない分野はない。適度の競争は人間の励みになるが、過度に陥りやすい。競争では、相手に打ち勝つことが必要であり、そこに争いが起こり、怨みをほらむ。これが平和を乱し、戦争のもととなる。

かつて日本学術会議（会員二〇名）の本会議場で、これが問題となった。競争の世界に秩序あらしめ、平和を維持するにはいかがすべきか。会議は一時間もつづいたであろうか。妙案も出ないまま、会議は行きづまりを見せた。そこで私は挙手して発言を求めた。仏教の開祖は積尊であるが、自らを「勝利者」とあると言われた。仏教において勝利とは、相手に勝つことではなく「己れに克つ」ことをいう。ここにすべての人が勝利者となる道が開か

れている、と。会議場は一瞬静まり、この論議はそこで終わった。

五

私がアジアの国々に関心を抱いたのは、戦争の結果であった。小学校の時（昭和二年）蘆溝橋事件が起き、中学の時太平洋戦争となり、旧制高校の時（昭和二〇年）終戦となった。

戦後間もなくアジアでは多くの国が独立した。インドはイギリスの植民地であったが、分離独立し、ヒンドゥー教のインドとイスラム教の東・西のパキスタン、東パキスタンはバングラデシュになった。セイロン（スリランカ）とビルマ（ミャンマー）は、仏教で独立した。マレーシアやオランダ領のインドネシアはイスラム教で立ち、自由なシンガポールもマレーシアから分かれた。フランス領であったインドシナ半島では、ヴェトナム・ラオス・カンボジャ等が独立した。またフィリピンも独立した。タイ国は戦前からの独立国であったし、中国は毛沢東と蔣介石の内戦がつづき、共産主義の中国と自由な台湾となった。これら戦後独立したアジアの国々の特徴は、それぞれ国のアイデンティティーの根柢を多く宗教が共産主義に求めたことである。

六

しばらくして、アメリカを中心としてアジア研究が盛んとなり、やがて我が国でも経済復興が緒に就くと共に、これに追従するこ

となる。昭和三八年（一九六三）、名古屋にアジア・エートス研究会が生まれたことは、私の研究にとって誠に幸いであった。名古屋地域の諸大学の研究者およそ四〇名、倫理学・社会学・文化人類学・仏教学・宗教学・教育学・法学・経済学など、あらゆる分野からアジアに対する関心から参加した。壮観であった。明治以降の日本では、西洋の見方・考え方をよしとし、それを規準としてきたが、アジアにはアジア特有のエートスがあって、価値意識も異なる。現代に対応する仕方もそれぞれ異なるものがある。当然であるとして、マレーシア・スリランカ・インドネシア・フィリピンなど、アジア諸地域の現地調査をした。大きな主題は、アジアのエートスと近代化の問題であった。一九六〇年代から約四〇年間に多くの成果をあげた（『アジア・エートス研究会——その四十年の軌跡——』二〇〇三年、あるむ刊参照）。

私共はこれによって、アジアにはアジア的価値意識が流れており、己れに対立するものの価値を認め、それと共生していこうという相手を尊重する精神があると考えた。西洋の価値観は、自己以外の価値を厳しく排除しようとしてきた。しかしアジアでは、欧米の価値観にとって代わらなければならないとは、考えていないのである。

七

私共の研究の大きな主題は、アジアの近代化にあった。アジア

にとっても、日本にとっても、近代化とは西洋化の謂である。近代は西洋に始まった。宗教改革、自然科学の発達と産業革命、大陸の発見と植民地支配など、そこには、西洋先進諸国の繁栄が見られる。

明治になって開国した日本は、文明開化をはかり、富国強兵を国策として、西洋に追いつけ、追い越せと走り出した。日本にとって近代とは、実は近代化に苦しんだ時代であった。私は、日本がアジアの他の国々よりも少しく先に近代化できたのは、日本人の性癖によるところが多かったと考えている。その性癖とは、純粋性を好む潔癖症にある。西洋の自然科学を見ると、要素に分析する能力が重要である。日本人の純粹好みや潔癖症はこれにかかわっている。

韓国や中国の大陸の人々は、包容性や総合力にすぐれている。このことは、卑近なところで日々の料理の仕方を見ても分かる。私は世界の各地を旅行する時、その国の典型的な料理は何かを考える。料理は毎日三度三度、どうすればおいしくできるか考える。それ故、その国の民族性がよく現れるように思われる。日本料理は一つ一つの素材の味を生かすことを考える。韓国と中国の料理は、ずいぶん違っているが、それでも素材をミックスして融合調和の味を作り出す点は同じである。「味の素」は日本人の発明だと言われる。宜なるかなと思う。かつて私がインドネシアに行った時、ジョクジャカルタの街角で、遊んでいた子供から Mr.

Aihomoto と呼びかけられたことを思い出す。

料理の話はともかく、学問的な話としては、日本の国立大学の中国哲学の教授が、葬儀を仏教から切り離して、葬儀は仏教ではない、と真面目に主張されているのは困りものである。仏教には教義仏教と民衆仏教の二面あることをお考えいただきたい。中国では、北京居士林の理事長夏法聖氏が、仏教も儒教も一致していると述べている。そこには力強い融合がある。

因みに、日本仏教の特徴は、宗派に分かれていることである。

これは鎌倉期の祖師たちが「選択」して仏教の優劣をはかった結果である。日本仏教の源泉をなす比叡山の仏教は、韓国仏教を見ても分かるように、総合仏教である。天台・密教・禅・戒律から浄土教まで総合している。しかるに比叡山に学んだ鎌倉仏教の祖師たちは、例えば、法然・親鸞は念仏を、道元は禅を、日蓮は法華を、それぞれに選り出して宗派が生まれた。選択は廃立に通じ、弊害を生じた。選り捨てて顧みないのは、日本人の潔癖性にはよく適合したが、真の仏教ならば、捨てた筈のものも救い取らねばならない。それでなければ一切の衆生を救い取る慈悲の仏教にならない。大乘の精神に合わないのである。仏教の宗派は、日本人を分断する働きをしている。日本の仏教徒は、宗派の信者であるよりも前に、まず仏教徒であることを自覚すべきではないか。

八

さて、明治から走り出した日本の近代化（西洋化）と富国強兵の道は、西洋のいい処ばかりでなく、悪い処も見習う結果となった。その最たるものは、領土の拡大と植民地支配であった。西洋の先進諸国の繁栄がそこにあるのを見た日本も、それを見習う結果となった。私の小学校時代、学校では世界地図を見せて、日本の国がいかに小さいか、資源が少ないか、を教え、西洋のように領土を拡大しなければ、日本の繁栄はない、と教えられた。まさに侵略のすすめである。日清・日露など、戦争の結果、日本は樺太・千島から、台湾・朝鮮を領土とし、満州にも手を延ばし、中学時代には太平洋戦争となって、大東亜共栄圏を礎くのが、日本の正義だと教えられた。私が疑うことを知ったのは、旧制高校の時である。敗戦によって自分の考えの正しいことが立証されたように思った。

近代思想の特徴の一つは、人間は自然科学の力によって、地球上の資料を利用し、無限に利益を受けることができる、という考え方であった。この考えが、領土拡張・植民地支配につながっていた。この考えは、今でも地球上に残っている。しかしこの考えが通用しなくなったのが現代である。

太平洋戦争によって近代は終わるが、大戦後しばらくは混乱がつづいた。はつきりと現代が発現するのは、一九七二年(昭三五)のローマクラブによる『成長の限界』が発表されてからである、と私は考えている。地球上の人口が増大し、食糧は不足する。石油など地球上のあらゆる資源が枯渇して、数十年しかもたない。地球は温暖化し、環境は破壊される。水も空気が汚染される。人類は宇宙船地球号に乗り合わせ、共通の運命にある。人類は今までのような成長を期待することができない。今は sustainable development (持続可能な発展) を考えなくてはならない、というのである。このままでは、人類は生き残りをかけて争い、地球上は恐らく修羅場と化すことであろう。その時代はすでに始まっている。

一〇

世界中到處で紛争が起こり、その原因がしばしば宗教にあるとせられる。異なる宗教間の協調が必要である。大戦後世界最大の融和の運動に ecumenical movement (教会一致運動) がある。ローマ法王が発信して、キリスト教内部はもちろん、ユダヤ教からギリシャ正教など広く一神教との間の対話を行ってきた。仏教にまで呼びかけがあり、かつてマレラ枢機卿が日本に派遣されて

アビールがなされたことがあった。

この種の運動の中に、統一とか帰一を呼びかけるものがある。平和や融和を謳って、一神教へ導こうとするものがある、注意を要する。この動きを利用して、勢力の拡大をはかるものと思われる。その点「一致」を呼びかけるのは、相互の立場を認め合った上で、互いの一致点を見いだし、対話によって理解を深めようとする趣があっているのではなからうか。ここでは私の経験を述べる。

デンマークの聖書協会が日本聖書協会を通じて、日本仏教会に『聖書』を贈りたいと言ってきた。日本仏教会では、こちらからも仏書を贈るから、それを受けてくれればいただきます、ということになった。中外日報社が仲介して仏書贈呈親善使節団が結成せられ、三回にわたってデンマーク・スウェーデン・ノルウェーの北欧三国に、仏書を携えて渡ったのである。その第一回は、昭和三九年(一九六四)六月から三か月にわたって、デンマークから世界一周して仏基の交流が行なわれた。使節団は、駒沢大学保坂玉泉総長を団長とする超宗派のおよそ三〇名であった。私もまたその一員であった。この時、北欧三国の大主教 (Bishop) による歓迎を受け、さらにローマ法王に謁見、それに WCC (スイス、世界教会協議会)・NCC (ニューヨーク、合衆国教会協議会) 本部等々、世界のキリスト教の中枢部を歴訪するを得て、キリスト教が世界に働く様を、具さに体験することができた。こ

これは、仏教とキリスト教との大戦後最初の平和友好の交流と言うことができる。第二回の親善使節団（团长末広愛邦師）は、スウェーデン、第三回の使節団（真如苑の方々）は、ノルウェーをそれぞれ中心に行なわれた（『前田惠學集』第六卷第二章の報告参照）。

第一回のデンマーク訪問に参加した私の印象について述べたい。デンマークは、今ではヨーロッパの玄関といわれるが、船で渡欧した時代においては、ヨーロッパの中でも最も奥地の遠い国であった。日本人にとっては未知の世界と言えた。その国のキリスト教は、日本の仏教とは全く無縁のものであった。この場合、ヒューマニティーに対する信頼をもって交流することは可能であり、事実そうした考え方が日デ双方に見られたことは当然であった。

しかし私はむしろ逆に、双方全く異なる立場に立つことを認め、その上で一、致点を見いだすようにする方が、はるかに新鮮であり、効果が多いと知った。これは私にとって新しい発見であった。

最近、比叡山では世界各国から宗教者が集まって、世界平和を祈る宗教サミットが開催されている。昭和六二年（一九八七）から始まって今年は二〇周年をむかえた。八月三日・四日「世界宗教者平和の祈りの集い」を謳い、世界一九か国、仏教・神道・キリスト教・イスラム教・ユダヤ教・ヒンドゥー教等の宗教者二〇〇〇人が参加した。対話を通じて相互理解を深め、「愛と慈悲に基づく和解と許し」によって世界平和を祈るのであるという。平和の集いとか平和会議とかは、世界の各地で行なわれているが、

目で見える形の成果は現われにくいにしても、人々の平和への願いを象徴的に示しており、宗教サミットが比叡山で継続されることは、その意義は少なくない。

世界の各地で開かれている平和会議や集いの一つについて、記録を持ち合わせていないが、単なる宣伝ではなく、真面目な企画が多いような印象を受けている。それだけ、世界の情勢が深刻なのである。

一一

平成八年、日本学術会議主催で、第三回アジア学術会議が開催された。主題は「多元的アジア世界を支える倫理の基盤について」であった。この時取り上げられたのは共生の問題で、イスラムの側からは板垣雄三氏が「イスラムと共生」について述べ、仏教の側から私が「仏教における共生」を論じた。板垣氏の論述の中心は、*संन्यास* であった。タウヒードは、神が唯一であると信じ、それを表明することといわれる。仏教の共生が、人と自然、人と人との間を取り上げるのに、イスラムではいつも神の前に立たされる。何とかならないであろうか、というのが率直な感想であった。

私は平成三年から九年まで、第一五期・第一六期の日本学術会議会員であった。当時、共生の思想がマスコミに大きく取り上げられ、連日共生の文字を見ない日はなかった。しかし共生の思想

が実は仏教に由来することは、まだよく知られていなかった。私
が共生思想の発生が仏教にあると発言して、大方の注目を集める
ところとなった。学術会議におけるいくつかの会合に出席を求め
られ、説明をすることとなった(『前田惠學集、第六卷、核の時代に
おける平和と共生』第一章等参照)。詳細は省略するが、共生はもと
もと名古屋に根ざした思想で、大正期の椎尾辨匠師の共生運動に
溯源し、最近では黒川紀章氏の『共生の思想』によってマスコミに
乗り、それが共感を呼んでたちまちに全国にひろがった。共生は
一方で人と自然との共生に関わる。人間も自然の一部であり、人
間は自然から酸素を受け、自然は人間の吐く炭酸ガスを必要とし
ている。仏教では、自然界の山川草木も生きており、生ある者は
成仏する(山川草木悉皆成仏)と考える。ここに環境世界と共に
生きる人間の姿がある。他方共生は人間と人間との間に関わって
いる。ここでは身近な地域社会の問題から国家や民族、人類の幸
不幸が問題となる。今日の地域コミュニティは長寿社会となつて
いるが、そこで大切なこととして私は、(1) モノの命を大切にす
ること(ゴミもモノである)、(2) お互いに嘘を言わないこと
(隣人の信頼)、(3) 思いやり慈しみの心が大切である(住みよい
地域)、と訴えてきた。

共生の問題は、さらに地域環境から人類の運命や地球の未来に
関わる。すでにこの地球が宇宙船地球号として運命共同体である
ことを知れば、人間は欲望の充足を無限にはかることは不可能で

ある。今日の「持続可能な発展」ということで、この煩惱の世界
を制御し切れるであろうか。仏教は昔から「知足」の思想を主張
してきた。人間は生きるための最小限のところまで満足するのでな
くてはならない。世界は成住壊滅をくり返す。終わりはない。従
ってまた絶望もない。しかしいつかはまた輪廻することになる。
そうした世界は苦の世界である。それからの解脱を説くのが仏教
である。

思いつくままにアジアにおける平和の思想について、いくつか
の論点を取り上げてきた。アジアの諸地域には、係争の地域がな
くはないが、中東など、他の地点に比すればまだまだましである。か
つての日本は、アジアの平和を攪乱してきた責任をもつ。日本人
の中にはその血が流れている。血気を静めるためには、仏教の役
割は小さくない。国際協調性を具え、平和への意志を強く具えて
いることは、誰しも認めるところであろう。与えられた紙数も尽
きたので、この辺で筆を措く。

(まえだ・えがく、現代アジア仏教・原始仏教・上座仏教、
愛知学院大学名誉教授)